

【海外拠点】山口銀行釜山支店、山口銀行青島支店、山口銀行大連支店、山口銀行香港駐在員事務所

【現地駐在】TTB銀行(タイ・バンコク)、HD銀行(ベトナム・ホーチミン)

明倫国際法律事務所ホーチミンオフィス(ベトナム・ホーチミン)



【青島支店】

中国における医療事情

1. はじめに

コロナ禍の中、私たち中国駐在員はゼロコロナ政策による往来制限により、長期間日本へ帰国出来ない事態となりました。コロナ禍の中国での生活の中で駐在員が一番困ったのは医療サービスを受ける事だったと思います。

高度成長が続き、様々な分野の商品やサービスにおいて日本を凌駕している中国ですが、駐在員の多くは、医療が必要な際は「日本で診てもらいたい」と考えています。コロナ以前は、多くの駐在員が年数回の日本への一時帰国の際に、健康診断や歯の治療を行っていました。

このような時期に筆者は手術が必要なケガをしてしまい、中国の医療事情を知らずにも体験することになってしまいました。今回はその際の体験や、中国の医療事情についてレポートさせて頂きたいと思います。

2. 中国の病院事情

中国で体にメスを入れることについて、悩まなかったといえば嘘になりますが、痛みに耐えながらPCRや様々な手続きを経て日本へ帰る自信がなく、中国での手術を決断しました。中国では、一般的に「〇〇整形外科」のような個人開業の病院が日本に比べて少なく、多くの医師は大きな病院に所属しています。地域医療は大学附属病院や公立病院が中心で、私も大学の附属病院へ搬送されました。その際に感じた日本の病院との違いについて、いくつか挙げさせていただきます。

(1) 病院に行くのは大変

中国の場合、「病院に行く」となると日本のようにまずは「地域のかかりつけ病院」へ行って、手に負えない場合は大病院を紹介してもらうという仕組みが一般的ではありません。小規模な個人病院は非常に少なく、風邪をひいても大病院へ行って長時間並ばないといけないため、一般市民にとっては「病院に行く」というのはハードルの高いものとなっています。大きな病気が疑われる場合だけ大病院へ行き、症状が軽い場合は「中医」(漢方などを処方する中国式の病院)へ行くのが一般的です。

(2) 患者の入院は大きなビジネスチャンス

中国では、患者が入院した場合、手術までに何回も様々な検査を受けることとなります。私の場合は、肘の手術を受けたのですが、人間ドックかなと思うほど内臓もきっちりと調べられました。医療コーディネーターによると、「病院としては他の病気が見つかる治療費で収入が増えるからという側面と、患者も大病院に行く機会がなかなか無いので、これを機に全部診てもらいたいニーズがあるから」とのことでした。



※筆者撮影：医療コーディネーターの広告（外国人が病院に行く際は語学堪能なスタッフが付き添って、不自由なく医療サービスが受けられるように手配するサービス）

(3) お金は先払い

これは海外全般に言えることですが、治療費は前払いが基本です。手術前に様々な検査をする過程で、医師が「次は〇〇を受けてもらうから、窓口で〇〇元支払ってから待合室に行ってください」と頻繁に言われました。命の危険がある場合も先にお金を払わないと救急車にも乗れなかったケースがあると聞いたことがあります。

(4) 看護師の役割が違う

入院して一番びっくりしたのは、看護師の役割が違うことです。中国では投薬や包帯の交換など以外で看護師と出会う機会があまりありません。日本のように親切丁寧に身の回りの世話をしてくれることはなく、代わりに家族が24時間付き添うことが必要となります。病院食も無い病院が多いため、食事を出前などで調達するのも付き添いの家族の重要な役割となっています。私の場合は単身赴任で家族の付き添いが出来ないことや、言葉の面もあり、医療コーディネーターの方に24時間付き添って頂きました。

(5) 入院生活は騒がしい

あくまで私の入院した病院でのお話ですが、地域でも有名な大学病院であったため、日中は医師も外来の対応に追われます。ということで、入院中の私の診察は大体朝の6時～7時に行われ、診察前の検温や投薬で朝4時に起こされることもありました。病室内でテレビや携帯の音を出すことにも制限がなく（マナーとしてあまり定着していない）、イヤホンを付けないため日中も色んな音でうるさくて安静な入院生活は困難でした。一般的に入院生活はこのような感じが多く、安静な環境が欲しい人は割増料金を払って個室へ行くそうです。



※筆者撮影：筆者が入院した病棟。日本の病院と大きな違いはありません。

3. 変わり始めた歯科

近年変わり始めた「歯科」についてご紹介します。私は2014年に初めて中国へ来ました。留学で約1年間中国に滞在する予定だったのですが、経験者の方から「歯だけは事前に日本でよく診てもらった方がいいよ」と言われ、事前に通院したのをよく覚えています。

実際に中国へ来てみると、日本人などの外国人向けに医療コーディネーターの方もおられ、言葉の面のデメリットはあまり感じないなと思っていました。しかし、ある日、20歳くらいの留学生が虫歯になり、中国の歯科に通院したところ、有無を言わず抜かれて帰ってきました。20歳くらいで永久歯を抜かれるなんて考えられないと感じ、中国で歯科だけは行かないようにしようと歯磨きを念入りにするようになりました。しかし、最近他社の駐在員から「中国の歯科も変わってきたよ、昔とは違う」ということをよく聞くようになり、一念発起して行ってみることにしました。

私の場合、治療済の被せものが取れただけだったのですが、治療室には最新鋭と思われる機材が並び、日本へ留学経験のある歯科医師の顔写真や経歴が掲示されていました。

その後、実際の治療に進むのですが、口の中の全ての歯を専用のデジカメで撮影し、画像を見せながら、「この歯は処置済だが、あと1年くらいで破損する可能性がある」「この歯は問題ない」など丁寧に全ての歯を説明してくれました。治療も非常に丁寧で、抜くなどということはなく、「これは日本よりレベルが高いのではないか」と思わせるものでした。



※筆者撮影：現地歯科医院の様子

4. 日本にとってのビジネスチャンス

中国の人にとって、医療の分野はまだまだ日本に後れを取っているというのは共通認識としてあるようで、中国人医師と会話をしている、「日本とは違い、中国ではまだこうだ」という話がよく出てきます。

そんな中、中国人と結婚した日本人の方がある事例を紹介してくれました。彼の義理の父母は病気で、中国では納得する処方箋を示してもらえず困っていたところ、日本の医師に診せる方法を思いつき、やってみたそうです。

具体的には、中国での診断書やレントゲン画像などを日本の専門家に翻訳してもらい、データだけで日本の病院で診察してもらうという方法です。診断時と診断結果の翻訳で数十万円の費用がかかったそうですが、納得する処方箋も得られて、義理の父母も大満足だったそうです。このようにデータで行う方法や、実際に医療のために他国へ行く医療ツーリズムは今後有望な市場になり得る可能性があります。

5. おわりに

中国山東省と山口県は友好関係にあり、コロナ前は毎年山口県の企業が山東省を訪れ、ビジネス商談会を開催していました。その際に山東省側から特にニーズの高い分野である「医療、介護、IT」の企業を連れて来てくださいと言われていました。

私個人も「医療はまだまだ日本が上だ」という認識がありましたが、実は私自身が中国で手術をした後に日本で診察を受けた結果、「中国の医療レベルは上がっているね。見事に治療してあるよ、安心して下さい」と言われました。しかし、中国はまだまだ医療水準は日本には追い付いていないと考える人が多く、機会があれば日本の医療を受けたいという層は確実に存在しますし、年々所得や生活水準が向上していることを考えると、これからも増えていくのではないかと思います。

山口銀行青島支店では、中国に関する様々なご要望やご相談を承っています。ぜひお気軽にお問合せください。

(山口銀行青島支店 藤井 謙治)